

「人間にとってこの上ない悦びと幸福は、天の深い秘密を知ること、自然の奥底にある神秘、神的精神、世界秩序を壊しあてることにある。」——彼の知識への渴望の強さを如実に表わしている言葉である。もはや天に自分を委ねることもできず、世相にも健やかな事態を見出せないカルダーノは、ただ知の探究に己を託して生きていったのだろう。ここに私たちは百科全書的人間の根源を見出さなければならぬ。と同時に生活に危機感を抱かざるをえない時代を生きた一知識人がなんとかして知と生活を時代の潮流の中で保たせていった生きざまを目のあたりにするのである。

3 知のメディア

黄金の知の世紀

十五世紀のフィレンツェで活躍した哲学者マルシーリオ・フィチーノは、同時代の著名な数学者にして天文学者パウル・ファン・ミデルビュルフに宛てた書簡の中で、十五世紀を次のように描いている。

黄金の今世紀は、ほとんど影をひそめてしまっていた自由七学芸や、文法、詩、雄弁術、彫刻、建築、音楽、オルペウス風叙情詩の古代的響きに、ふたたび光をもたらしました……親愛なるパオロ（パウル）よ、貴方は天文学を完成させました。フィレンツェではプラトンの教智に光がさしこみました。ドイツでは書物が印刷されるための機械が発明されました。

（傍点 — 訳者澤井）

フィチーノはここでみずから生きて活躍した時代を、△黄金の世紀▽、つまり△黄金の知の世紀▽として定義づけ、諸学芸の復興は言うに及ばず、彼がその著作の翻訳に力を尽くしたプラトン哲学の勝利や天文学の進歩を挙げ、最後に印刷術（活版印刷）の発明を忘れずに掲げている。彼が△印刷▽をこうして連ねたことは、△黄金の知の世紀▽という言葉に集約される十五世紀にとって、△印刷術▽の発明発展が必要不可欠な要素であることを明言していると言えよう。

このフィレンツェ・プラトン主義の巨頭が脳裡に想い描いた知にはキリスト教的な知のみならず、ヘルメス思想、新プラトン主義の理念など魔術の知の系譜に属するものも当然含まれていたことであろう（フィチーノの哲学思想したい、キリスト教思想の枯渇を魔術の知を取り入れ、両者を折衷させることで救わんとしたものである）。そうした無形の、理念としての知が、△形▽を宿した精神文化として、知識人はじめ一般の人たちに広がっていくためには、活版印刷の普及に如くものはなかったにちがいない。

なるほど文化を精神的な産物として規定してもよいかもしれないが、それを補充してくれる媒体として印字された書物のもつ物質性もけっしてなおざりにできるものではなからう。フィチーノの慧眼はこの事実を見抜いていたのである。彼はプラトン『饗宴』の注釈書を書くが、この中で扱われた愛の理論、いわゆる△プラトニック・ラヴ▽は印刷による書物の普及がなかったならば、著者の死後もあれほど流布はしなかった。ピエートロ・ベッポ、カステイリオ、レオーネ・エブレオなど十六世紀に活躍した当代一流の著述家の愛の理論はすべてと言ってよいほど、フィチーノの愛の理念を基調としていたからである。

かりに手写本の時代がいぜんとしてつづいていたのならば、たとえ愛の理念は語り継がれていたにせよ、普及のペースはまさに「遅々として」という副詞がびったりとあてはまっていたはずである。活版印刷の実用化は人びと（それもあらゆる階層の人びと）に印刷本を供給するとともに、知的発見、意思疎通、思想や学知の伝播拡充にこれまでにないほどの速度を加えたことになる。その具体例がフィチーノの△プラトニック・ラヴ▽の普及なのだが、この注釈書はラテン語で書かれており、俗語に翻訳されてさらに多くの読者を得たことと思う。

つまり印刷は思想や理念の流布という点で翻訳作業も促したわけである。ギリシア語からラテン語へ、ラテン語から俗語（イタリア語）へ、イタリア語から別の俗語（フランス語やドイツ語など）へと翻訳は進められ、人びとは自分の喋っている（読める）言語で書物を綴ることができるようになった。この点、印刷術の貢献度には測り知れないものがある。

古典への情熱

ところでここで少し立ち止まって考えてみなければならないことがある。それはフィチーノの時代以前の、ういういしい初期ルネサンス期はどうであったか、ということである。なぜならイタリアにおけるハ知の復興Ⅴを育て上げた知性的・市民的・経済的・政治的環境は、フィチーノの時代（十五世紀）ではなく、その前の十四世紀にこそ在るからである。

ちなみにグーテンベルクによる鑄造方式、加圧方式の印刷機の発明は一四四七年で、実用化は一四五〇年代（『四二行聖書』の印刷は一四五二―五五年）である。つまりハ知の復興Ⅴたるルネサンスは印刷術による強烈なインパクトの以前にすでに興っていた、ということなのである。ペトルルカ、ポッカッチョ、サルターティ、ブルーニ、ポッジョ・ブラッチョリーニなどルネサンス人文主義の礎を築いた人たちは、あるいはニッコロ・ニコリ、アウリスパ、教皇ニコラウス五世、パツラ・ストロツツイなどの古写本蒐集家たちは、活版印刷の出現以前あるいはほぼ同時代に世を去っていた。ギリシアやローマの主だった古典の古写本は印刷術の出現以前にすでに集積されていた。

studia humanitatis（古典的人間教養の研究）やそれを不朽のものとした学者たち、コンスタンティノブルにまで出かけて行って書物を渉獵蒐集したり、ギリシアから直接取り寄せたりして知識を蓄えんとした人たちは、さらに集めた本で図書館設立にまで至らしめた人たちは、印刷術導入以前のイタリアに生彩を与えた人物だったのである。極論すれば、ルネサンスはその誕生と存続を活版印刷の発明に拠っていないことになる。

印刷術出現以前すなわち古写本時代の人たちの蔵書量を探ってみよう。ペトルルカは二〇〇点、サルターティは八〇〇点の手写本、ニッコロに至っては書簡の蒐集に明け暮れて財産をなくし、コジモ・デ・メディチの援助を得て蒐集を再開し、それはフィレンツェのサン・マルコ修道院図書館の基礎（ギリシア古典の古写本八〇〇点）となったほどである。ニッコロはたいへんな情熱家で、入手した古写本をみずから筆写し、人を雇っても筆写させた。さらに古写本だけでは飽き足らず、大理石の像、古代の聖水盤・彫刻・碑文など、過去の歴史理解に役立つ事物をすべて再現しようとした。

アウリスパはラテン古典の古写本は言うまでもないが、ニッコロ同様東方に旅に出て、ギリシア古典の古写本（二三八点）を持ち帰った。ポッジョは遠くクリュニ―修道院やザンクト・ガレン修道院にまで足を伸ばしてケケロの未知の演説集、クインティリアヌスの古写本の一部などを発掘した。パツラ・ストロツツイはコンスタンティノブルから基本的なギリシア古典の文献を取り寄せて目録を作成した。そのほとんどが一四〇〇年代に写されたもので、ヘシオドス、三大悲劇作家、テオクリトス、クセノポン、デモステネス、ポリュビオス、プラトン、アリストテレス、プロティノスがあった。またラテン古典も蒐集しており、ケケロ、リウイウス、セネカ、ウエルギリウス、ホラティウス、ルカヌス、スタティウス、カエサル、クインティリアヌス、テレンティウスなどであった。

ウルビーノのフェデリーコ公も当代きっての蒐集・蔵書家で、その「根本方針は、ラテン詩人とそれに関する重要な注釈から始め、次に雄弁家、ケケロの作品と共に秀れたすべての作家と文法家、それからラテン語で書かれたすべての歴史書、同様にラテン語に訳されたギリシアの歴史書並びに雄弁術の書。またラテン語あるいはラテン語に翻訳された道徳哲学と自然哲学についてのあらゆる作品」をその文庫に収めることだったという。なぜ

なら彼の文庫の「書物はすべて最高級の美本」で、もちろん手写本。それも羊皮紙に書かれた美しい挿絵入りで、未熟な技術で成った粗雑な印刷本などは論外だったからである。

当時の君主や裕福な商人たち、それに知識人たちの書物蒐集に對する情熱はこのように法外なものであった。それは新しい時代の營養源として、古典の中に人類の師を、人生の規範を見出そうとしたからである。つまり中世の神の永遠の相の許で生き得た生き方、靜的な知とはちがって、古典の中に、精神の自由を求めて人格形成を行なわんとする動的な知を、變化する知を探究した。さらに政治的知恵も、自然をリアリスティックにあるがままに見つめる基本姿勢をも発見した。

加えて十四世紀末にビザンティン帝国からクリュソロラスがフィレンツェに到来してギリシア学（それまでイタリアではごくわずかな地域を除いてギリシア語は読めなかった。ペトラルカもポッカッチョもギリシア語は理解できなかった）が興り、ストロツツイ家やメデイチ家などの有力商人がパトロンとしてギリシア・ラテンの古典作品の蒐集普及に一役買った。

ギリシア古典蒐集への情熱はイタリア・ルネサンスにおけるギリシア学の發展形態が背景として考えられるであろう。段階的に眺めてみると次のようにまとめられる。

第一期——十四世紀末クリュソロラス、フィレンツェに渡来。十五世紀初頭ギリシア語学習の本格化、ギリシア学者が育つ。ギリシア古典の翻訳。

第二期——東西宗教会議（一四三八—三九年）、コンスタンティノーブル陥落（一四五三年）。ビザンティンからすぐれた学者が渡来（ベッサリオン、ゲミストス・プレトン、アルギュロプロスなど）——対立論争が起ころ。

第三期——批判的ギリシア研究が成育し、フィレンツェ・プラトン主義が興る。ルネサンス文化の絶頂期。当時、知の世界はギリシア学の流入を機に大きく揺れ動いており、文化交流の流れは時代轉換の激動と直結していた。

一方ラテン古典の方はポッジョに代表されるように、各地の修道院に所蔵されている古写本の発見、古写本発掘のブームが巻き起こった。

書籍商と図書館

修道院で再発見されたりギリシアからもたらされたりした古写本は、たいていが君主などの要人や富豪に贈呈されたが、古典への需要が増大するにつれて一点一古写本では間に合わなくなり、古写本を筆写して新たな手写本を作り出す作業が求められるようになった。筆写する者にはプロの写字生もいれば経済的に恵まれない学生のアルバイトもいた。そしてこうした一連の工程（古写本↓筆写↓手写本）を管理統括する職業が当然出現し、当時の風潮を背景に一躍成長産業へとのがあがっていった。

その代表格が十五世紀のフィレンツェで生彩を放ったヴェスパジアーノ・ダ・ビスティッチである。彼の開いた書店（ポッテীগ）は良心的出版社として良質の本（芸術品としての本）を世に送り出すところであり、また書籍情報、すなわち時代の知のセンターでもあった。顧客は当代の学者はもとより、学芸愛好家、書籍愛好家たる有力君主たちであった。ヴェスパジアーノは彼ら（たとえばウルビーノ公）の書籍蒐集にも力を貸して、いま言う書籍コ・ディネイターとしても活躍した。

この時代は修道院において古典の再発見が次々となされ、いわば眠っていた知識が修道院の外に出たハポスト修道院✓期にあたるわけだが、当時の出版を業とする者はおよそ三つのタイプに分けることができる。

① 営利を目的とした書籍商。さまざま手写本を生産した。

② 特別な注文のために私的に写本をして出版。

(3) …… 大学とつながっていて、大学のカリキュラムなどに合わせて写本の仕事を請け合う出版者（大学宣誓書籍商）。

以上であるが、ヴェスパジャーノは、(1)の要素もないわけではないが、おおむね(2)のタイプに属すると言えよう。いやもっと正確に言えば、 Δ 世紀の書籍商 ∇ である彼は、博識な市民の助けを得て、古典写本や当代の人文主義者の優美な版本をイタリアの要人や外国の要人（スペイン・アラゴン王家のアルフォンソ寛大王、ウルビーノのフェデリコ公、ハンガリー王マリーチャーシュー一世など）が設立せんとした図書館に送る商売を始めて繁盛したのである¹⁰⁰。

こうして手写本への要求が増大して専門の書籍商が定着してくると、書物を単に保管するだけでなく読み調べる場としての、公的な図書館の出現が当然望まれることになる。中世の修道院にももちろんその修道院の特色や地域性を生かした図書館はあって、本の貸し出しなどが行なわれていたが、やはり一般的な研究機関とは言いがたかった。大学の図書館、たとえばパリ大学ソルボンヌ学寮の図書館は十四世紀中葉において蔵書は二、〇〇〇冊に達し、ルネサンス期の哲学者の情報源となった。ペトルルカもサルターティも、このソルボンヌ図書館の古写本を手写したプラトン著作集のラテン語訳を所有していたと言われている。

ルネサンス期には修道院や大学とは別個の公共図書館が発展した。修道院・大学といった専門的で閉鎖的な場から知識が外へと抜け出したわけだが、見方を変えれば個人的書籍蒐集熱の極まった形が図書館設立への胎動と言えるであろう。

前にも触れた、フィレンツェのサン・マルコ修道院の図書館（ギリシア古典写本八〇〇点）。メディチ家のラウレンツィアーナ図書館。フェッラーラのエステ家の図書館。ミラノ公の図書館（一四五九年の時点で五〇点。反スコラ学、人文主義的趣味を反映して、スコラの文献や科学書が少ない）。ヴァティカン¹⁰¹の図書館（ニコラウス五世が創建。一四七五年シクストゥス四世下で公的形態成る。その時点で二五二七点の手写本。ギリシア語写本が多いが、ギリシア哲学やギリシア教父たちの著作のラテン語訳書もある）。ベッサリオン寄贈によるヴェネツィアのマルチャーナ図書館。ウルビーノ公フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ蒐集による図書館。ナポリのアルフォンソ寛大王による図書館。

十五世紀最大の蔵書はピーコ・デッラ・ミランドラのもので、ギリシア・ラテンは言うに及ばず東方の知の書物にまで至った。彼の死後甥のジャンフラチェスコ・ピーコに売られたが、そのうち散佚の憂き目に遭った。イタリア以外ではハンガリー王マリーチャーシューのイタリアの図書館をモデルとした図書館、イングランドのグロスター公ハンフリーの図書館、ブルゴーニュ公の図書館が著名である。こうした図書館はたいいてい、十六世紀の中葉までは印刷本よりも手写本の方を収めていた。

ところが十五世紀末に勃発したイタリア戦争によって、イタリアに集められていた Δ 財産 ∇ はほとんどはヨーロッパ（アルプス以北）に逆流した。ナポリ、ミラノの書はスペイン、フランスへと運び去られたのである¹⁰²。

知の拡張

図書館の Δ 財産 ∇ のヨーロッパへの逆流入の時期はちょうど、アルプス以北へのイタリアからの知の移出が、印刷術（印刷本）によって加速化された時期と合致する。古写本・手写本の知識で礎を築いたイタリア・ルネサンスの知はイタリア戦争による混乱と、印刷の普及によって新たな局面を迎えることになる。体裁よく言えばイタリア文化の国際化となるが、とどのつまり通俗化を意味しているわけである。印刷術発明以前のイタリアでは三、四世代かかった知の流布が、いまやアルプス以北の国々では印刷術によって一、二世代に圧縮されたのである。

年代的に言うところとした兆しは一四八〇年代から始まっており、前出のヴェスパジャーノの商売にもそろそろ響りがみえ始めてくる。にもかかわらず彼は次のような気概を示して印刷本をけなす。印刷本は「手写本の醜悪

な模倣品にすぎない。紙は悪質で立っており、文字はよこれて滲みで汚れている」と。事実、初期の印刷本は仕上がりが劣悪であり、誤植の数の多さも目立っていて、要するに手写本支持派側からすれば、書物の芸術的裝飾性に欠けている点が批判的のようになっていた。貴重な本の印刷にはほど遠い段階にあった。印刷の特徴である量産性においては布告紙やパンフレット程度に留まっていた。したがって一四七〇年代頃まではいまだ手写本は安泰であった。つまり活版印刷が拡大し生産が多様化し、それに伴って読者層が出来上がるまで、活版印刷は知の領域にさほど大きなインパクトを与えなかったことになる。それでも一四七〇年までにはヨーロッパの約十九都市で活版印刷が行なわれていた。なかでもイタリアでの普及はめざましかった。

印刷術以前のイタリアにおいても印刷術以後のイタリアにおいても、文芸や学知の面でのすぐれた文化活動は、書物生産における技術面での洗練と平行して発展しており、その技術の枠内での可能な限りの出版が求められた。イタリア諸都市では文化が大学や修道院から外に出て、新興貴族の宮廷へ、市庁舎へ、市民の住居の中へ、修辞学の学校へ、職人の工房へと拡散・拡充していった。文化が従来の知の専門家（聖職者が代表格）の領分を越えて流布し出したのである。それはまさに市民的 (civile) という性格において具現化され、種々な形態、わけでもさまざまな文章形態をとって明らかにされていった。

そうした新たな知識は主に私塾やアカデミーを通して伝播普及し、書物という形をとって集成され顕在化した。おのずと手写本の数は増大した。ドイツで活版印刷術が発明されると、こうした素地の育まれたイタリアでは、初期段階での技術的貧弱という障害はありながらも、印刷文化は急速に触手を伸ばしていった。幸か不幸か、前述したようにそれは折しもヨーロッパ諸国へのイタリア的知の普及（国際化）と重なり合っていたのである。十五世紀末から十六世紀初頭にかけて、印刷業者は知の重要な結節点の役割を担っていたわけである。

当時、知識を得るためにはラテン語の習得が第一歩であったが、印刷本の増大はラテン文法書の量産を可能にした。初期刊本期（一四四〇—一五〇〇年）ではラテン文法書が最も多く印刷された。学童や学生はラテン文法書、語彙集、初級講読本の印刷本を容易に所有することができた。その他古典、大学の教科書、算数の本、技術書、俗語の自習書、手紙の書き方などのハウツー本も出版されて入手可能となった。こうして多くの人たちが知へへと参加することが可能となり（裏を返せば知への世俗化の進展）、学的、政治的、宗教的議論が以前にも増して盛んに行なわれるようになった。

古典の出版

ここでは古代の復興を主眼としたルネサンス文化の華である古典作品の印刷に視線を向けてみよう。

古写本や手写本で多量に集められた古典の教習は印刷によってどう普及していったのか。その回答のひとつとして次のことがまず明らかとなるはずである。つまり限られた数の古典の写本が印刷によって多数化した、ということである。

時期的に辿ってみると、ラテン作家たちの著作の大多数は初期刊本期（一五〇〇年まで）に、ギリシア作家たちは一五二〇年までに、ルネサンス期に知られた他の著述家たちは十六世紀末までに印刷本として刊行された。一四六八年から七五年にかけてローマで、アブレイウス、カエサル、キケロ、ヒエロニムス、リウイウス、ルカヌス、オウィディウス、ウエルギリウスなどのラテン作家たちの著作が、教皇シクストゥス四世の命を受けたジョヴァンニ・アンドレア・ブッシを編集担当者として、スヴェンハイムとパンナルツの二人によって印刷された。初版はいずれもだいたい三〇〇部前後であった。ヴェネツィアでは一四六九年にヨハン・シュパイアーが、プリニウス、リウイウス、キケロ、アウグスティヌスなどの著作を刊行した。ヴェネツィアでの印刷はこの出版を端緒に以後イタリアにおける印刷業をリードしていくことになる。

フィレンツェの書籍商ヴェスパジアーノが初期の印刷本の劣悪さをなじった言葉を先に掲げたが、その後技術

改良が進んで印刷本の仕上がりは手写本を凌駕するまでになっていて、一般の芸術品としての価値を持つようになった。この時期に登場したのが、アルド・マヌーツィオ（アルドゥス・マヌティウス）である。ローマ近郊で生まれた彼は印刷業者となる前はみずからも人文主義者で、わけでも言語学に長じ、一四九三年には自著である『ラテン文法書』を印刷している。一四九四年にヴェネツィア総督の甥などから財政的援助を受けて、錨と海豚を商標とするアルド書店をヴェネツィアに開いた。

彼自身ピーコの友人、ポリツィアーノの礼賛者であり、卓越した人文主義者であることから判るように、第一は教師、第二が編集者であった。したがっていかによく生きるかを皆に知らせる使命感を帯びて出版に携わった。生き方の知は古典的教習の会得であって、勢い古典の出版が主流となるわけで、一四九五年から一五一九年まで、一三〇点あまりの出版を手掛けた。内訳は異教のギリシア古典がなんと言っても第一の数にのぼり、皆はじめて印字されたものばかりである。プラトン、アリストテレス（全五巻）、トゥキディデス、アリストパネス、エウリピデス、ソポクレス、ホメロス、デモステネス、アイソポス（イソップ）、プルタルコス、ピンドロスなどをギリシア語の草書体で精力的に編集刊行した。それもアルド版とよばれる文庫本の形態にしたため容易に入手できた。俗語ではフランチュスコ・コロナナの『ポリフィロの夢』を挿絵つきで出版。ほかにダンテ、ペトルルカ、サンナザーロ、ベンボの作品も出版した。

アルドが商売を始めた一四九四年はシャルル八世がイタリアに侵入していた年（イタリア戦争の開始。一五四四年のクレピの和議で終結。イタリアにおけるドイツとスペインの優位確立）でもあり、彼は戦争と戦争によるあらゆるものの破壊の間に、閉じていく時代と開いていく新しい時代を鋭敏に察知していたと思われる。一五〇八年にはエラスムスを招いて彼の『格言集』を出版しベストセラーに仕立てている。アルドの手で成った印刷本は芸術的印刷の典型とさえ賞賛された。アルド風活字（イタリア風活字Ⅱイタリック体）体を造って、従来のゴシック体から明晰で読みやすく優美な活字へと改良したことでも著名である。これらすべての業績に対してフランスのある人文主義者は、「イタリア最大の印刷業者、ヨーロッパにおけるギリシア語文献印刷の眞の創造者」との賛辞を贈っている。

俗語作品の刊行

こうして隆盛を誇ったアルド書店だが、十六世紀の半ばを過ぎる頃から、俗語（イタリア語）本を刊行する新興のジョリット書店にその栄華を奪われていく。ギリシア語やラテン語よりも、話し言葉が直接文字化した生きた言語、つまり俗語の時代の到来である。これは印刷の普及の第一の申し子であるうか。それとも時代の趨勢か。その一例として、十五世紀に渡来したギリシア人学者たちはすでに世を去っており、古典知もゆきわたってはや飽和状態になっていて、人びとはなにかしら新奇なものを求めていた。

ともあれ一五三六年にジョヴァンニ・ジョリットがヴェネツィアに設立したジョリット書店は、息子ガブリエレが四一年に出版を開始し、九九年まで一〇五〇点もの本を刊行した。ガブリエレは四一年から六〇年に至るまで文芸のあらゆるジャンル（対談集、戯曲、書簡集、ノヴェッラ、歴史、詩、祈禱書など）のイタリア語著作を上梓した。著者としては、アレティーノ、アリオスト、カステイリオネ、ドーニなどがある。一方で彼はダンテの作品、法律書、哲学書、科学書、数学書、神学書といった、おきたい本はいっさい出版しなかった。加えてラテン語のタイトルの作品も刊行しなかった。俗語一本の態度は徹底したものであった。明快なイタリック体の活字を使用しかつ魅力的な装幀、巧みな挿絵など、炎から羽ばたく不死鳥を商標として繁栄した。

さてアルドもジョリットもイタリア戦争を体験するわけだが、戦後の勝利はイタリアのものではなくヨーロッパのものであった。十五世紀後半から始まっていたイタリア文化の拡散化は、四散（*ディフュージョン*）という形をとることになる。この四散をかるうじて防いでくれたのがスイスのパーゼルの出版業者で、彼らは驚くべき完全な形で、イタリア人文主義の貴重な遺産を後世へと託してくれた。

知の細分化

ジョリートによる俗語作品の刊行事業は、裏を返せば、印刷の発展によって俗語が流布していたからとも言えるであろう。ジョリートはその波を敏感に察知して商売を始めたとも考えられよう。ラテン語を基調とした統一世界の互解する音が静かに兆しつつあったのである。それはルターなどによる宗教改革によって、カトリック的統一性が崩壊した事態とも重なり合っている。また近代自然科学に代表される新たな知的分野の研究が盛んになってきて、それが印刷技術の進展に伴って拡充した事実も、旧来の知に大きな打撃を与える要因になった。

たとえば、サヴォナローラの反対派に対する論文、ルターをめぐる論争、フランスの宗教戦争に伴う政治論争、天動説と地動説の宇宙観論争などは印刷の発達のおかげで、回答にも日数がかからず、大勢の人たちが参加できた。以前は討論するために遠方からわざわざ集い、聴衆も限られており、内容普及にも時間を要したからである。科学書も挿絵の鮮明な複製が可能となり、解剖書、動植物図鑑、地図、機械図などに精度が増した¹⁰⁰。

こうして印刷文化によってある種の知は、それまで埋もれていたのが陽の目を見、ある種の知は華々しくも登場したのである。

十六世紀以後ヨーロッパは事実上、すでにカトリック（普遍的）世界ではなくなった。普遍性を支える知識はいつのまにか潰え去り、細分化された個別的な知が芽吹き始めたのである。そしてそれには印刷文化の隆盛が蔭ながら一役買っており、想像以上に大きなインパクトを与えたのである。

4 ム文法Vの位置

批判精神

ルネサンス期の思想・哲学の啓蒙的普及書として、二十人あまりの思想家を選び出して論じた邦語文献に野田又夫『ルネサンスの思想家たち』（岩波書店、一九六三年）がある。新書判の手頃さも手伝い、またボンボナツィ、テレジオ、ザバレラなど日本ではいまだによく知られていない哲学者も取り上げられていて、これを読むことでルネサンスの多様な知的思潮の認識への足掛かりとなりうる入門書的価値のある本である。年代順に紹介がなされており、第一番目には十五世紀前半に活躍したロレンツォ・ヴァッラが扱われている（最後は十七世紀前半に没したガリレオ）。

ヴァッラは「コンスタンティヌスの寄進状」が八世紀に作られた偽文書であることを指摘したことと著名な学者であり、ここでもム批判的人文学者Vの副タイトルが与えられ、不屈の論客として語られている。彼の哲学的著作としては『快樂について』（一四三一—三三年）、『自由意志について』（一四三五、四三年）が有名である。

ヴァッラは持ち前の鋭い批評眼をもって、当時隆盛を極めつつあったブルーニ、パルミエーリ、ポッジョ・ブラッチョリニ等を代表格とする市民的人文主義者を攻撃する。当時の人文主義的教育とは、文法・修辞学・道徳哲学・歴史・詩学の五分野の習得で、わけでもダンテ、ペトラルカ以来の伝統である道徳哲学は古代人の叡智を營養として人間がこの世で生きていくうえでの責任、人間の尊厳、美德の探究と悪徳の駆逐・回避を扱ったもので、ヴァッラの活躍した十五世紀になってますます脚光を浴びるようになった。しかもこの時代の人文主義はム市民的Vと冠されていることでも判るように、都市コムーネにおける市民のありよう、市民的名声の追求など、本来キリスト教との仲介的立場をとるべきはずの道徳哲学が宗教色を失い、市民道徳を扱う学問として自律的に機能するようになった。本質的にキリスト者であるヴァッラはこれに反発し、人文主義の中に宗教色を回復させんとする。そのために彼は五分野の中の修辞学に着目し、キリスト教信仰のために古代の著述家の豊かな表現と説論を用いて信仰心を培い徳及び人生理念を涵養せんとした。したがってヴァッラにとって人文主義とは、キリ